



# 小児緩和とグリーフケア

臨床心理士  
西尾 温文

## グリーフケアキャンプ

死別の悲しみに寄り添い、見守るグリーフケアの場、エッグツリーハウスを私はボランティアで2014年4月から始めました。そのキャンプについて報告させていただきます。

昨年夏のグリーフケアキャンプは計3回行いました。7月と8月が家族を亡くした子どもと保護者を対象とした2泊3日のファミリーキャンプ、9月が16歳から35歳までの青年を対象とした1泊2日のキャンプでした。

参加者は子どもが17名、大人が14名、青年が3名。死別の特徴は、子どもの死因が脳腫瘍などの小児がん、大人の死因が急性心不全、動脈破裂による突然死、がん、自死、犯罪死でした。



◀かまど  
マッチで新聞紙に火をつけ、小枝、細い薪、太い薪を加えています。



◀食事作り  
子どもにはファシリテーターが1人に1人付き添います。子どもは5歳から中学生までが参加しました。

グリーフケアキャンプのプログラムは「自然体験」「食事作り」「作品作り」の3つで構成しています。子どもたちは保護者から離れテントで寝て、朝は鳥のさえずりとともに目を覚まします。周りは樹々に囲まれ、緑が気持ちを癒してくれます。キャンプそのものが「自然体験」です。

「食事作り」は大人と子どもに分かれて班を作り、ご飯は米を研ぎ薪で炊いて作ります。どの家庭もガスや電気でご飯を簡単に炊ける時代です。お金を出せば食べ物も簡単に手に入れます。キャンプでは、便利な暮らしをしている子どもや大人が、料理をするには不便な所で食事作りをします。みんな楽しそうです。どうしてなのでしょう。「食事作り」は生きる基本である食べることを通して、いわばヒトがもともと持っていた食べる喜びという原初的感覚を取り戻させるからではな

いでしょうか。

次に「作品作り」です。形のあるものを作ることはその時の記念になるばかりでなく、子どもも大人もその時の感情を作品に投影します。たとえば、子どもを亡くされた方が描く絵にその子が描かれていることがあります。あるいは、今の感情が作品に表されます。感情は形を与えられることで目に見えるようになります。



◀バンダナ作り  
生地に布染色絵具で絵を描いています。

前号で死別体験は孤独感、孤立感をもたらすと書きました。孤独感、孤立感は、自分は他の人とは違う、普通じゃないという感覚が元になっています。それは、死別体験によって、自分の大切な人、身近な人が明日も元気であるはずという安全感が失われ、安全が約束されていたはずの世界が崩れてしまったことによります。死別体験は、体験した人にしか分からない孤独感、孤立感に加え、明日の安全を信じられないという不安感をもたらします。

では、グリーフケアはどうしていけばよいのでしょうか。



◀青年たちのピザ生地作り  
生地を作りトッピングして石窯で焼きます。青年は20代の若者です。

キャンプは、班で仕事をするすることで人と人を結び付け、孤独感、孤立感を和らげます。そして、食べる、作ることを通して自分の喜び、感情への気づきを促します。

キャンプ実施1か月後、大人の方にアンケートを実施しました。参加した大人は共通して、キャンプ期間中、亡くした子ども、パートナーを感じられたと答えています。悲しいけど楽しめること、悲しさとともに喜ぶこと、それがグリーフケアの目的です。